

今日死んでも

悔いの残らない生き方を望む。

在宅医療をベースに

新しい社会システムを構築する。

2010年1月、東京都文京区に開院した

医療法人社団鉄祐会祐ホームクリニック(以下、祐ホームクリニック)

(<http://www.you-homeclinic.or.jp/>)は、

在宅医療専門のクリニックである。

院長である武藤真祐氏は、在宅医療をベースに

高齢者の生活を支える仕組みを構築することで

日本の将来に資するとの理念を持ち、開業に踏み切った。

循環器専門医として臨床の現場に立つうち、

日本の医療構造に問題意識を持つようになり、

志を持って行動に移ったのである。

Pre cursor

先駆者

武藤 真祐

医療法人社団鉄祐会 祐ホームクリニック理事長・院長



ゆるやかな ネットワークを 組んで医師団を形成

東京都文京区。千石駅にほど近い閑静な住宅街の一角、マンションの1室に祐ホームクリニックがある。表札のあるドアを開けると、在宅医療専門診療所とはこういうものかと、ひとつ、「学んだ感」を強くした。本拠地は診察室を持たないスタイルだろうと察してはいたが、20前後のデスクが並び、座って執務をする人とデスクの間を動きまわる人、さらには相談、打ち合わせをする人たちがいて、彼らの醸し出す活気と雰囲気は大病院のものとも、個人クリニックのものとも、まったく違っていた。

「あのスペースに日中には、20人ほどのスタッフがいます。うちわけは、医師、看護師、事務職で、ひとつのフロアで職種の垣根なく打ち合わせをしています。

中でも特に在宅医療連携室には看護師等専門職3名を配置。当クリニックを頼って在宅医療を受けようとする患者さんの最初の相談窓口として、電話で患者さんや家族の相談を受けつつ、患者さんの情報収集や訪問日時調整、診療方針の検討などを行っています」

武藤氏と副院長の齋藤善医師を常勤医師とし、そこに13名の非常勤医師とゆるやかなネットワークを組んで医師団を形成。加えて経験豊かな看護師と

も連携しつつ患者のニーズに合ったオーダーメイドの在宅医療を提供する。開院以来約1年で延べ約500人の患者を診察し、うち80名を居宅で看取ったという。クリニックの滑り出しは、いたって順調であるように見える。

「徒手空拳で『始めてしまった』割には順調にきています(笑)。地域の在宅医療へのニーズが、想像を超えて大きく、また訪問看護師やケアマネジャー等の在宅医療チームの方々に大きな期待を寄せていただいているのを体感しているところです。さらに私の考えに賛同しネットワークに加わってくれた医師の多さにも、うれしい驚きを感じています」

超高齢社会をいち早く迎えた

日本の動向を世界が注視

冒頭に記したとおり、武藤氏は目の収益を追って事業を立ち上げたのではない。彼の所信は同院ホームページで詳らかにされているので、ぜひ参照してほしい。特に「武藤真祐の社会活動」とタイトルがつけられた「活動」のコーナーにある「高齢先進国モデル構想趣意書」は、彼が今、何をめざしているかを理解するには必須だ。

「高齢者が望んでいるのは、医療や介護、行政や企業、NPOなどという区割りを超えた、トータルな『生活を支える仕組み』。そのニーズにいかに対応するかは、提供者側にとって難題なの

はそのとおりでしょうが、ひとたび視点を変えれば日本社会や日本経済が、ここから先に向けて勇躍するブレイクスルーの種でもあります。

したがって私は、このテーマをポジティブにとらえ、ポジティブに取り組み、ポジティブな成果を生み出してみたいと考えます。実は超高齢社会を先進国でいち早く迎えた日本の動向を、世界中が注視してもいます。世界に先んじて超高齢社会に突入した日本がどんなチャレンジをして、どんな答えを示すのかと。

在宅医療をベースにしたまったく新しい住民サービス、国民サービスを構築し、世界を納得させる事業に心躍るのは私だけではないはずだ」

2割を発言、提言に割き

8割を在宅医療などの臨床に費やす

「武藤真祐の社会活動」にはまた、「対談」コーナーがあり、対談者ライオンナップの豪華さと対談内容の高度さに目を奪われる。武藤氏の発言者としての意欲の高さがひしひしと伝わってくる——そのような感想を述べたインタビューアーにしっかりと釘を打ち込んできた。

「私は発言もしていますが、発言は自らが現場に出ているからできるものだと考えている点を見落とさないでいただきたい。活動の約2割を発言、提言に割いていますが、それは8割を現場

や臨床に費やしているから可能なのです。『発言する医師』が、現場力を失った医師であるケースが、しばしば見受けられますが、私は、それではまったく説得力がないと思っています」

事実、武藤氏の日常は、週に4〜5日を診察日とし、定期診療の他、日中の緊急診療要請に対応。週に4日は夜のオンコール当番もこなす。「そして残った2日を、発言や提言の活動にあてています」とさりとらう。彼には休日の概念がないようだ。

「そうですね、だから体はかなり疲れています。突然死などが待ち受けているかもしれないと思うほど……。しかし、そうなったらそれはそれで私は受け入れます。大切なのは、その瞬間、その瞬間、自分が納得する生き方をしているか否か。そう考えて小さいころから生きてきました。

私は、後悔を残して死ぬのだけはいやなのです。ゆえに今日が人生のピークであるような生き方をしたいし、しなければならぬと思っている。変わり者でしょう(笑)。そういう自覚もありますよ」

「君は、自分の名前で仕事ができるのか」 胸に突き刺さった二言

自己分析を促すと、「単純なのです」と簡潔な言葉が返ってきた。

「6歳のとき野口英世の伝記を読み、自分も困っている人を救う仕事に一生

PROFILE

むとう・しんすけ

- 1996年 東京大学医学部卒業。卒業後、東京大学医学部附属病院、三井記念病院にて循環器内科、救急医療に従事、診療所にて在宅医療にもたずさわる
- 2002年 東京大学大学院医学系研究科博士課程修了
- 2004年 宮内庁で待医を務める
- 2006年 マッキンゼー・アンド・カンパニー勤務
- 2009年 早稲田大学大学院ファイナンス研究科専門職学位課程修了
- 2010年 祐ホームクリニック開設
内閣官房高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部医療情報化に関するタスクフォース構成員に就任
経済産業省地域新成長産業創出促進事業ソーシャルビジネス推進研究会委員に就任
- 2011年 医療法人社団鉄祐会設立。一般社団法人高齢先進国モデル構想会議設立

を捧げようと誓いました。単純だからそのとおりに医学部に進み、医師になった。東京大学医学部の内科にはすばらしい指導者と先輩方、同僚がいて循環器内科医としての私は恵まれていましたし、臨床医としての毎日は充実感でいっぱいでした。ただ、根源に野口英世がおり、『医師として社会に役立つのは、これが限界なのか』と自問する声が消えませんでした」

考え抜いて出した結論が、「医師の潜在能力を、専門職の枠にとどめておくのはもったいない」。医学の専門知識だけでなく高い総合力も身につけられる可能性を持った医師の能力を花開させられれば……。ひとつの道が見えると、東大第三内科医局員のポジションをあつさり捨ててしまった。

選んだのは「2年限定」と宣言したうえで、医療から離れる道。マネジメントを学ぼうと決めたのだ。そして選択したのは、世界のトップコンサルティングファームであるマッキンゼー・アンド・カンパニー。その間、週末は早稲田大学大学院に通学し、ファイナンスMBAと米国公認会計士資格まで取得した。

「35歳で医局を離れた前後は、激動でした。医局の先生方、先輩、同僚には慰留もいただきましたし、実際に医局を離れる段になったら応援の言葉もいただけた。けれども何より、ある先輩から指摘された言葉はインパクトがありました。『君は、自分の名前で仕事を



できるのか』。胸に突き刺さりました。

今思うと、これは挑発でもあったのですが、単純な私は（笑）、それにも乗った。これまで学んだ方法論が『1を100にする』ならば、医局を離れてマネジメントを学び、実践すべき方法論は『0を100にする』ものであると明確にわからせてくれたのです」

医療における志のために私を封じてまで邁進する人物

乱暴なまでに、純粹である。医局を離れ、医療を離れ、マネジメントを学び、開業にいたる。東京大学医学部の卒業生としては、明らかに異端である。だが、話が進むうちにまだ、医局に籍があるとわかった。

「永井良三先生（元・東京大学医学部

附属病院院長）のはからいで、籍を残していただいています。先生からのエールをいただいていると受け止めています」

前述の「対談」コーナーに、「東大内科の四天王」と呼ばれる金澤一郎氏、黒川清氏、矢崎義雄氏、そして永井良三氏が全員登場している事実には、「信じられない」との声を発した医療関係者がいる。「武藤氏とは、いったい何者なのか？」とも。

さすがに日本の最高学府の、出身者のトップだ。異端を認め応援する懐の深さには感服する。志のために私を封じてまで邁進する人物の清々しさ、それを鷹揚に見守り、エールを贈る先達の美しさ。久方ぶりに心洗われる思いとともに、日本の医療の未来にはつきりとした光明を見出せた。